

西国第二十八番 成相山

御本尊／聖観世音菩薩 開基／真応上人

橋立真言宗 成相寺

苦と楽は背中合せ

山主 石坪弘真

成相寺参道の本堂直前に百段ほどの石段があります。山寺ですのでそれに厳しく、皆さん途中休みやすみ息を切らして登ってこられます。そして最後の石段を踏み、登り終えられたその表情は皆さん観音様との出会いへの期待からなのでしょうが、とても清々しくとても良いお顔をされているように思います。

そう言えば私が幼い頃、学校で文章には起承転結が必要だと教わり、青年期には人生にも同じく起承転結があることを学び、そして還暦を前に大病を患って生と死、苦と楽は表裏一体なのだも身をもって学びました。

係するエピソードをお話ししましょう。我が師僧のお話です。

我が師僧は遷化後（亡くなって）三十九年が過ぎますが、未だにその思い出は色褪せることはなく昨日のようによみがえります。世寿九十九才でした。長く床に就くこともなくその直前まで百寿に向けての執筆に励んでおりました。

当時九十歳くらいの時だったでしょう。久し振りに来られたお客様が「ご老師様、益々お元気そうで、百歳までは大丈夫そうですね。」とおっしゃいました。益々の長寿を願われての発言だったように思いましたが、少しの静寂と共に、師僧の顔色が変わっていつ

たのでした。そして「あと十年しかないではないか・・・。」いつも朗らかな師僧とはかけ離れた声と表情に、皆が鉄瓶から上がる湯気をじつと見続け、その場が凍り付いたのを思い出します。

後に師僧に発言の意味を聞きました。すると、「これまでの人生を思い起こせば、この九十年の間には色々あった。指折りあれこれ思い出しても、大変な事ばかりが多かった。しかしそれも今思えばたった一日の出来事のように感じる。」そして、「人生いよいよ老境に入り終着が見えてきた事は否めない。しかし老境に入りて思うのだ。若き頃より苦勞に苦勞を重ね、幾多の別離や無常を乗り越え、苦勞して蒔いてきた種がやつと成長し、人生の面白さもわかり、今まさに充実した日々を感じ謝と楽しみの中で過ごしているの。に。たつたあと十年とは・・・。」

天晴れです。私には到底理解できない領域だと感じました。素晴らしく生きるエネルギーに満ちた人間でした。きつとその様に元気で充実した老後を送ることは多くの方が望まれる事でしょう。

今思うに、師僧の如く人生を終えるかは、どの様に日々を生きているかだと考えます。人生を終えるその時まで、いかに生きるかという事だと思えます。これは僧侶だから考えることではありません。誰にも訪れることなのです。いつの世も生きていくのが苦しい、そのような方もおられるでしょう。け

れどこの尊い唯一の命、苦しく辛いまま人生を終えるのはもったいないではありませんか。

師僧は言いました。「苦しいから楽が有るのです。苦と楽は背中合せに有るのです。」

ならば楽しく生きられるよう思いから巡らしてみませんか。出来れば少しずつ楽しみを増やし、自分の周りを出来うる限り前向きに捉え「苦しい辛い」を「楽」に変えて行こうではありませんか。

ちなみに先に述べたお客様ですが、後日のご訪問では十才上乗せて「ご老師、百十才までは大丈夫！」と言われておられました。我が師僧は苦笑い（微妙な表情）でした。

